青少年海外視察研修

光町の未来を担う青少年に、豊かな人格と広い国際感覚を培ってもらうために実施している青少年海外視察研修は、今年で12回目を数え、8月23日から28日の6日間、11名の研修生が参加しマレーシアとシンガポールを視察しました。

シンガポール学生との交流や異国の文化に触れた数々の体験を終えた研修生は、ひとまわりもふたまわりも成長して帰ってきました。

日本の小ささを肌で感じた6日間

団長　小川 一徳
（市野原・大学生）

初めて訪ねる海外に少しの不安と多くの期待を抱いてマレーシアに向けて出発しました。

マレーシアではマレー系、中国系、インド系など様々な民族が共存しているところに目が付き、閉鎖的な日本では見られない光景に妙な感覚を覚えました。

マレーシアの旅の中で一番印象に残ったのが、マラッカからジョホール・バルへ移動のために乗ったマレー鉄道の車窓から見た庶民の生活です。所々で車窓からプランテーションで働く人々の集落を覗くことができ、走り去る電車に向かって手を振る子ども達の笑顔を見た時、この国が持つバイタリティーを感じました。

シンガポール視察では、中でも特に印象に残り、得るものが多かったのは現地学生との交流と千葉県シンガポール事務所で聞いたシンガポール教育の実態です。

シンガポールはアジアの中でも最も苛烈な能力別教育を行っていて、上位コースを維持するためには常に猛烈な勉強が要求されています。大学に入学できるのは同一学年でもわずかでしかなく、しかも在学中の成績が就職と直接影響するため常に気を抜けないそうです。

誰もが大学に入ることができ、エリートを輩出するという本来の目的、機能を失いつつある日本の大学にいる自分は、これからの変化の激しい国際社会に取り残されてしまうか、ついていけないのではないかという不安を感じてなりません。

僕は今回の研修を通して、最低限の外国語として英語は必要だと実感しました。また、友達と観光で海外を訪れていたら気づかなかったような、現地での日本人観光客マナーの悪さや、あまりにも国際性のないところにも目がつきました。今回の研修では、いかに日本が小さく狭く、また世界が広いかを肌で感じることができ、とても内容の濃い視察研修でした。

最後に研修生を代表して、このような機会を与えて下さった皆様に感謝し、この海外研修をこれからもずっと継続し、ますます発展させてほしいと思います。

王宮の門に立つ衛兵と参加者で記念撮影（マレーシアにて）

青年海外協力隊募集

青年海外協力隊は、技術や経験を活かして、アジア、アフリカ、中近東、中南米及び東欧諸国の国造りに協力する青年の海外ボランティア活動です。

昭和40年から始まった国の事業で、すでに66ヵ国約2万人の青年男女が派遣され、現在も59ヵ国で2,387名が活躍中です。

説明会日時・場所

10月18日(月) 午後6時30分　千葉県教育会館

11月5日(金) 午後6時30分　千葉市民会館

問合せ先　千葉県社会部少年女性課
〒260-8667　千葉市中央区市場町1-1　☎043(223)2396

東陽小

いいお米できたよ

東陽小学校4年生が5月に田植えをした田んぼの稲刈りを、夏休み明けの9月2日に行いました。

なれない手つきで一生懸命に稲を刈るこども達からは、「うまく刈れない」「鎌が切れないよ」という声があがり、指導する古屋区の皆さんも教えるのに汗びっしょりでした。

この稲刈りは、体験学習として行っているもので、できたお米は自分達で調理したり、光楽園老人ホームの皆さんと一緒に食事をしたりして活用するそうです。

こども達は、秋の収穫を身をもって体験した一日となりました。